

「生」の営みとしての絵画

岩元鐵郎

軍国主義の抑制が解かれ、荒れ果てた此の国に新たな生活が切れ開かれようとした戦後の十数年、前衛（avant-gards）という言葉には知識人、青年達を惹きつけてやまない、希望の輝きというものがあった。それは民衆の側に立つことを当為とした重い言葉。しかし、左翼の面々が牢獄から解き放たれ、変革は歴史の必然、と今にして思えば、その現実理解の底の浅さは、否定できぬものがあった。

美術界も例外ではない。1958年の九州派・九州アンデパンダン展のあいさつは、地方に波及したこうした波の一つだった。自由美術に属していた若き尾花成春が九州派に投じたのは1959年である。朝鮮戦争の特需が産業を復活させ、時代は経済の高度成長の端緒を掴む転換期に差し掛かっていた。所得倍増のかけ声は左翼のユートピア的言説を凌駕するリアリティを備えていたのだ。

画家は大正15年の生まれ、此の頃、国際電気株式会社に勤め、山間のケーブル中継所を守る仕事を担当していた。余暇の多い、願っても無い一人暮らし。周辺の子どもたちに絵を教え、彼自身を描くことが内面化していたのは、此の偶然あつてのことだった。

九州派の宣言があつて、半世紀近くになろうとしている今、美術運動としては、極言すればパフォーマンスばかり、とも言われているのだが、九州派として擡げられたものが現在一点ある。2004年、東京・京都の国立美術館で「痕跡」と題した企画展があり、ここに尾花成春の「自画像」が取り上げられた。画面に流された褐色のタールの量感によって、戦後の青年の自我の危機が象徴的に取り出されたのである。褐色は九州派の痕跡として永く記憶されていた。

半世紀の歳月が流された。今も、尾花成春は絵筆を執って、売れる筈も無い絵を描き続けている。其処は、表象すること、可視化することの試行錯誤が続いてきた荒野なのだが、具体的な「生」の真正性への執心が、誰からも奪われず、如何なるシステムにも分断されない「生」の一形式と為りおおせている。彼は此の営みに自足している。